The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『図書編』の成立 : その易学との関連
Author(s)	矢羽野, 隆男
Citation	中国研究集刊. 1995, 16, p. 63-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『図書編』の成立——その易学との関連

矢羽野　隆　男

序

明の章潢（嘉靖六年・一五二七～万暦三六年・一六〇八）の『図書編』（注一）は、従来、明代の社会・経済研究に有用な史料を提供する書として、また宋代以降に流行した易の図書学（後述）を集大成し易図を多く収録する書として知られている。また、類書史においては、同時期に成立した王圻の『三才図会』と共に、易図に限らず多くの図象を収録するという特徴をもつ類書として位置付けられている。しかし、その特徴が強調されるばかりで、如何にしてそのような特徴をもつ類書が成立したのかという点は看過されてきた。そこで、本稿は、主として章潢の易学との関連において、『図書編』の成立・構成の思想を考察する。

一、章潢の易学の梗概

先ず章潢が易学研究に進む過程を「章斗津先生年譜」「章斗津先生行状」（以下「年譜」「行状」と略記）に拠って述べる。

章潢は七歳で小学に入り、一〇歳で既に伏羲・文王・周公・孔子・顔淵・曾参・子思・孟子ら聖賢の図像を描いて書箧に祀り、聖賢の学に関心を示した。彼が一一歳の時、父の白城公は、師友と交わるのに恵まれた南昌の会城内に二人の息子を伴って移り住んだ。彼は童試すなわち科挙受験資格である生員となるための試験に備えて勉強を行ったが、一方で、弟の章漢と共に聖賢の図像を祀り朝夕に礼拝するなど、聖賢とその学

への思いを厚くしていった。

一六歳で章潢は科挙の受験資格である府学の生員に補された。当時の教育の一般的な風潮は、聖人に至る道を追究するものではなく、科挙に合格することを第一の目的とするものであった（注二）。父も、聖賢の学よりも先ず挙子業すなわち科挙に応ずるための受験勉強を重要と考えたのであろう、潢に命じて聖賢の図像を除き去り礼拝をやめさせている。また一九歳の時に、同郷の学者陳源（字は一泉）を招いて弟と共に教えを受けさせているのも、その翌年の嘉靖二五年から「年譜」に「挙子業を正気堂に肄う」とあるのと考え合わせれば、科挙受験の準備のためであろうと考える。

彼は二六歳まで弟と共に挙子業に努めたが、単なる試験勉強に終始したのではなかった。二一歳の時、宿師が「子、近日 経を談ずるや甚だ簡当なるを覚ゆ。如何」（「行状」）と問うたのに対して、「鏡を以て喩えんことを請う。昔 書を読むや物を以て鏡を磨くが如し。磨くこと久しくして、鏡 明らかなることを得たり。今 書を読むや鏡を以て物を照らすが如し。鏡 明らかにして物 自ら見わる」（同前）と答えた（注三）。これは明鏡の如き聖人の心を目指した心学的な修養の結果を述べたものである。

二八歳の時、父の白城公がこの世を去る。これ以後数年間が彼の学問の転機であったように思われる。彼は父亡き後の家の経営に腐心し、学問に専心することができなくなった。奮起した彼は、弟と共に「世上は只だ是れ利慾 心を薫くのみ。我が属 何ぞ錙銖（詰まらぬもの・ここでは財貨）に恋恋とせんや。食足れば可なり」（同前）と誓い合い、父の遺した債権手形を焼却し、志を合わせて学問に努めた。

ところが、父の喪も明けぬ嘉靖三五年、その弟の章漢も病の床に就き、「〔章〕漢の才識は〔章〕潢に十倍す。大成して遠く天下の重と為るに到る可し。〔章〕潢 請う 身を以て代わらん」（同前）という祈りも空しく、章漢は翌年二七歳で没する。章潢は三一歳にして、相継いで彼の学問の支えを失ってしまった。これを機に、彼は挙子業を廃し（注四）、「此れ（弟の死）自り学を為むるの志 愈いよ堅直、聖賢を以て自ら任じ、一ら〔伏〕羲・文〔王〕・周〔公〕・孔〔子〕を以て宗と為す」（同前）とあるように、専ら聖賢の学に努

めることとなった。

弟の漢の死後、章潢は次の二条を学問上の目標とした。一つは『中庸』三〇章の「仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章し、上は天時に律り、下は水土に襲る」であり、いま一つは『易』繫辞下伝の「昔者 庖羲氏の天下に王たるや、仰ぎては則ち象を天に観、俯しては則ち法を地に観、鳥獣の文と地の宜とを観、近くは諸れを身に取り、遠くは諸れを物に取り、是に於いて始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ、以て万物の情を類す」である。そして、「年譜」に拠れば、嘉靖三八年（一五五九）三三歳の条に「始めて『易』を学ぶ」という。童試・郷試には五経からも出題されるから、当然、それ以前から『易』を学んでいたはずである。すると、この「始めて『易』を学ぶ」とは、試験勉強とは性格を異にした易研究の開始を意味するのであろう。

父・弟の相継ぐ死の後、天地に則って八卦を画したことを述べる『易』繫辞下伝の一節を目標とし、彼の学問の根幹をなす易学を研究し始めたのは、父と弟との遺志を継承せねばならないという使命感からであったと考える。

前の三図（『図書編』巻一所載の古太極図・河図・洛書）并びに後の易卦先後天方図の八図（同巻二所載の先天八卦方位図以下の諸図）は、我が父 白城公 手ずから授く。時に弟の漢 尚お未だ総角せざるも（総角する年齢にも至っていない幼児であったが）、能く其の大意を了る。特だ意を挙業に注ぐに因りて、皆 束ねて之れを蔵するのみ。〔嘉靖二五年・二〇歳に挙子業に努め始めてから〕甫めて十歳（十年）にして父弟 継いで没す。是れを嗣いで易を学び象義を精研す（『図書編』巻一「古太極河図洛書総説」）。

これによれば、『易』の哲理を象徴的に図示した諸図を父から授けられ、弟は幼いながらもよくこれを理解したが、科挙の受験勉強に努める間に父弟が没したために、その遺志を継いで『易』特に易象を研究し始めたという事情を知ることができる。

彼の易学研究の態度や方法は次のようであった。

一卦を畫する毎に壁間に粘り、亦た卦爻の詞を以て逐一手づから書して之れを粘り、面対して嘿会

す。或るときには三五昼夜（一五日）を歴る。必ず一卦の意を得て始めて它の卦に易う。凡そ十五たび寒暑を易う（「行状」）。

『易』の卦を描いた紙と卦辞・爻辞を書いた紙とを壁に貼り、その卦に象徴された意味を体得するまで壁に向かう。このような方法を一五年続けて、万暦四年（一五七六）五〇歳でその易学の一つの成果と言える『周易象義』十巻を完成させている。

ところで、『易』はそもそも卦によって天地万物を象徴し得るという思想を根底に持つ。周知のように、漢魏には、卦を陰陽五行で象徴された数学的方法によって解釈する象数学が行われ、魏の王弼以降は陰陽五行による技術的数学的な術数を排除した義理学が行われるようになった。そして、宋代には『易』の哲理が研究される一方で、再び象数学が盛行した。例えば、宋代の象数学には、劉牧の河図洛書学がある。これは、漢魏の象数学と河図洛書伝説（繫辞上伝の「河 図を出し、洛 書を出し、聖人 之れに則る」に依拠して、河図洛書は天地の象徴であり、聖人はそれを規範として易卦を画したとする伝説）とを統合して河図洛書などの図象による象徴性を顕示した。宋儒の象数学は、この河図洛書学および邵雍の先天図学・周敦頤の太極図学の三系統に発展し、「河図洛書」の名を取って「図書学」と総称され、共に図象を用いて説明する点においては通じ合う（注五）。

では、章潢の易学はどのようなものであったか。『周易象義』の内容を、『四庫全書総目提要』（以下『総目提要』と略記）は次のように概括している。

是の書 象を言うを主とす。故に張行成が説を引き、以て晁公武の理を主とするの論を駁す。大抵は『漢上易伝』を以て椎輪と為し、虞翻・荀爽・九家易、及び李鼎祚・鄭汝諧・林栗・項安世・馮椅・徐大為・呂僕卿の諸家を雑え引き、而して参うるに己が意を以てす。其の象を取るの例 甚だ多きも、其の大旨を約せば、本体・互体・伏体の三者を出でず（『総目提要』巻八・経部・易類存目二）。

これに拠れば、漢易の象数を重んじた朱震の『漢上易伝』をその本源とし、虞翻らの説を援用して、義理学を退け、互体などの方法で卦象及び爻象を説いたものであることが窺える。

ではなぜ象を重視したのか。この点について章潢自身は次のように述べている。

孔子「生生を之れ易と謂う」。奚く自り生ずるや。陰陽 是れなり。「一陰一陽を之れ道と謂う。陰陽不測を之れ神と謂う」。象 若し以て之れを尽くすに足らざれば、然らば易や道や神や一や、得て見る可からざるなり。……〔天地の間に充満する陰陽に象って伏羲が画した陰爻陽爻、それを三つ重ねた八卦、更にそれを重ねた六四卦は〕孰れか天地陰陽自然の象に非ざらん。故に象に因りて名を異にし、名は象を以て定まる。名に因りて義を異にし、義は象を以て顕わる。蓋し易は文辞無しと雖ども六十四卦が卦象 各おの殊なり、三百八十四爻が爻象 各おの別る。郁郁乎として天下の至文なり（『周易象義』自序）。

すなわち、卦象・爻象が無ければ『易』の深遠な理は理解できず、伏羲が画した六四卦の象や三八四爻の象は、文字による解説こそ無いけれども、それによって天地万物自然を象徴的に示す「天地陰陽自然の象」「天下の至文」（注六）である。

其の象を設くる、辞を繋くる、或いは同じからざれども、孰れか伏羲の画する所を発明するの卦辞に非ざらん。然らば則ち孔子の彖伝・象伝に由りて以て文〔王〕周〔公〕を求め、文・周の卦辞・爻辞に由りて以て伏羲を求めば、易象 其れ庶幾からん（同前）。

文王の卦辞・周公の爻辞・孔子の彖伝・象伝はすべて伏羲の画した易象を理解するための手段である。結局、重要なのは、伏羲が画した易象の玩索による、「天地陰陽自然の象」「天下の至文」の体認に在ることになる。

右において、章潢の易学における易象に対する研究を概観した。次に、彼の図象による『易』研究、すなわち所謂 図書学について述べる。

道は一なるのみ。一は見る可からざるなり。凡そ天地の間、巨細隠顕 犂然燦然たる、孰れか此の一の散殊に非ざらん。〔伏〕羲・禹・文〔王〕・周〔公〕・孔〔子〕作りて天下に君師たりて自り、斯道の終に昧くして、人人 日用 之れを覚る莫きを懼るるなり。故に或いは之れが図を為り、或い

は之れが書を為り、或いは之れが卦爻を為りて、而して其の辞を繫く。道は本(もと)象無きなり。已むを得ずして之れを示すに象を以てす。道は本 言無きなり。已むを得ずして之れを示すに言を以てす。斯の人の為に慮ること至りて深く且つ遠くして、斯道 之れを万世に伝うる所以なり。卒に頼(らいわ)いに此の図書・易卦有りて証す可し。……近ごろ『易』を学ぶの暇に乗じて、爰(こ)に先哲の遺す所を緝(あつ)めてこれを編次し、益ます是の一なるを信ず（『図書編』巻一「太極河図洛書易卦象総叙」）。

これに拠れば、「図書」も「易卦」も共に、突き詰めれば、本来不可視にして天地万物を生み出しその変化を支配する理であるところの太極を象徴的に示したものにほかならない。よって伏羲が画した易卦が「天地陰陽自然の象」「天下の至文」とされるのと同様に、図書も「図書は天地の至文なり。道を求むるに諸れを天地の至文に求めざれば、其れ何を以て天地の化育を知らんや」（『図書編』巻一「河図洛書総叙」）と言語表現を超越した天地万物の道理の象徴であるとされる。章潢は、易卦の研究と同時に、この図書を収集研究したのである。

最後に、章潢の易学のもつ心学的性格を指摘しておく（注七）。

聖人の学は心学なり。聖人の易は心画なり。心は動静無く隠顕無し。是の心 本より象無し。聖人 特に卦を画して以て心に象どる。凡そ天地の間の成象成形百千万類、一として心に非ざる無し。一として易に非ざる無し。然らば則ち六十四卦三百八十四爻、孰れか心に非ざらん。世の易を論ずる者は易を以て易を求め、易を心に求むるを知らず。或いは易に方体無し（「方」は所、「体」は形）と謂いて心を虚無に寂(せきぜん)わしむ。或いは象数に止まりて心を名物に滞らしむ。又た悪んぞ知らんや 一卦一爻 皆 吾が心の学にして、万事万物の変化 皆 吾が心の象なるを。噫 此れ易の明らかならざる所以なり。易 明らかならずして、而して其の聖学を明らかにすると謂うや、吾れ之れを知らざるなり（『図書編』巻九「学易大旨」）。

ここで章潢は、彼の易学が心学であることを明確に述

べている。彼は、当時の易学者の、一は手段に拠らずに心を虚無に陥らせる態度、一は手段に拘泥して目的を見失う態度を批判する。彼にとって、易は我が心の象徴であり、易の研究は、それによって卦を画した聖人の心に達する主体的反省の手段であった。

先に、父弟の相継ぐ死ののちその遺志を継いで易を学び始めたことをのべたが、それに続けて、その態度・方法とその結果到達した境地とを次のように記している。

諸図に于いて体玩すること之れを久しくす。恍然として天地の間 耳に充ち目に盈つるもの皆 太極図書の法象(模範とすべき事物現象)にして、皆 易画・卦数(易卦に象徴される数)の鋪陳なり。古人の未だ図象を画さざるの先に於いて潜通黙会する者有るが若く然り。予 父・弟と久しく以て同に古人に游ぶ(『図書編』巻一「古太極河図洛書総説」)。

易図の「体玩」によって、自分を取り巻くもの全てが、それを模範として太極・図書が画された事物現象であり、卦とそれが象徴する数が一面に敷き詰められているのを悟った、すなわち、伏羲が彼を取り巻く事物現象に則って図象・卦を画いたのと同じ境地を悟ったと言うのである。前述の、卦・卦辞・爻辞を書いた紙を壁に貼り卦の意を「嘿会」するという卦象・爻象研究の態度・方法も、この易図の「体玩」と同様の方法であろう。外なる理を客観的に追究するというよりは、より直接的に心中に具わった理法を体認するという方法によって、易卦を画した伏羲ら聖人と同じ境地に達したということからも、その易学が心学的であると言えよう。また次のように述べる。

惟だ此の図(古太極図)に於いて之れを身に反求すれば洞徹すること疑い無きのみ。則ち知る 吾が身は即ち天地にして、上下同流・万物一体 皆 吾が身の固より有る所にして、外由り我を鑠する者に非ざるを(『図書編』巻一「古太極図説二」)。

ここには、孟子の「仁義礼智は、外由り我を鑠するに非ざるなり。我 固より之れ有るなり」(告子上)という内面主義を継承し、「人心は五経の本為り。而して『経は人心の註脚為り』(注八)と謂うは謾語に非ざるなり」(『図書編』巻九「〔五経〕総論」)という

に至った心学的立場を窺うことができる。すなわち、宇宙内の全てが我が心内の事として認識されることになる。章潢の心学的易学と天地人の諸事象を対象とする類書『図書編』の成立との思想的関連はここに在ると考える。

以上、章潢の易学が、宋儒以来の象数学・図書学の系統の中にあり、易象研究とそれに並行して進められた図書研究とを内容とするものであったこと、且つそれが明代の心学的性格を帯びたものであることを述べた。易象研究は、前述の通り、万暦四年に『周易象義』としてまとめられ、図書研究は、翌万暦五年に図書に関する部分を重要な構成要素とし且つ全体に図象表現という図書学的方法論を用いた類書『図書編』として一応の完成を見たのである。

第二章、従来の『図書編』に対する評価

前章において、『図書編』が章潢の易学、特に図書学と称せられるものと深く関係することを指摘した。ところが、『図書編』に対する従来の評価は、この点を無視するか、或いは僅かに示唆するのみで、詳細に考察せずに一定の評価を下しているようである。そこで『図書編』に対して従来なされた評価の検討を行いたい。

先ず、現在に至るまでの『図書編』評価の根幹をなす『総目提要』（巻一三六・子部一一・類書類二）の内容は次の四点に要約できる。すなわち、①図への関心、②全体の構成、③『三才図会』との比較、④「博物」「経世」的性質、である。この四点の内、本稿は図象の類書『図書編』の成立・構成の思想を考察の目的とするものであるから、①・②の二点に絞って検討する。

先ず、①図への関心に関して、『総目提要』は次のように述べる。

> 『図書編』一百二十七巻。明、章潢。潢に『周易象義』有り、已に著録す。是の編（『図書編』）は左図右書の意を取る。凡そ諸書に図の考う可き者有らば、皆彙輯して之れが説を為る。考証すべき図を諸書から採録してそれについて解説を加えた意図を「左図右書の意」によるとするのみであ

る。この「左図右書」の意味は後述する。

次に、『総目提要』を受けて纏まった評価を与えている清の周中孚『鄭堂読書記』（巻六二・子部一一下・類書類三）を挙げる。

前に自序有り。称すらく、「図書は天地の文章為り。今の豪傑を号称する者 豈に特り天地の文章に於いて未だ嘗て意を留めざるのみならんや（！）、図書の名義に即きてすら、且つ之れを辨ずる莫し。故に好んで載籍を蔵すと雖ども、何ぞ啻に万巻〔もてして〕其の所謂図書を究むるも、〔単に〕画工の末技・文字の煩蕪に過ぎずして、〔それのみならず〕天地の文に至りては宝ぶ所を知る莫し。予 因りて備さに其の身心に切にして国家に関する者を采りて、類を以て之れを編み、題して『図書編』と曰う」（注九）……其の体例を核むるに、当に古人の左図右書の意を取るべし。而るに自ら「義を天地の文（すなわち河図洛書）に取る」（注一〇）と謂うは、未だ泛びて（浮薄であって）当る無きを免れず。

これは、章潢自序を節録して、「図書は天地の文章為り」という章潢の図書学の基本的思考を明記しており、『図書編』編纂の意図・図象への関心の根底に図書学があることを示唆しているようではある。しかし、結局は「当に古人の左図右書の意を取るべし」として『総目提要』の評価を踏襲し（注一一）、「自ら『義を天地の文に取る』と謂うは、未だ泛びて当る無きを免れず」との価値判断を下している。

最後に、類書研究において参考する価値のある類書専門書目とされる鄧嗣禹『中国類書目録初稿』（古亭書屋・民国五九年）を挙げる（原文は現代漢語）。

この書は、左図右書の考え方を採用して（原文「取左図右書之意」）書物に考証できる図が有り、また事柄において表にできるものが有れば、すべて先ず図表を描いて要点とし、その後に説明を加えて考証を付している。

ここでも、「左図右書の意」によるとの『総目提要』の評価を踏襲している。また、この「左図右書」の意味を「（先に）図表」と「（後に、文字による）説明」と考えているようである。

このように、『図書編』が図に関心を持って多くの

図を採録した理由を、『総目提要』以来、「左図右書」の意を取ったためとする評価が定着している。では、「左図右書」とは何を意味するのであろうか。

「左図右書」の語自体は、用例としては古く溯ることができる。しかし『総目提要』に見える「左図右書」の語は、宋の鄭樵『通志』（巻七二・図譜略第一・索象）の一文を意識したものであろう。この『通志』図譜略は、宋・斉の間に王倹は『七志』に於いて図譜を収録するための図書分類項目として図譜志を立てていたが、『隋書』経籍志に至ってそれが廃されたために図譜が散逸したことを非とし、「専門の書有れば、則ち専門の学有り。専門の学有れば、則ち其の学必ず伝わりて書も亦た失われず」との立場から設けた学問・書籍分類項目である。後にこの『通志』を受けて乾隆三二年に勅撰された『続通志』の巻一六五・図譜略上には、『三才図会』と『図書編』との書名が見え、共に図譜の学の書と見なされていたことがわかる。四庫全書の総纂官として『総目提要』を著した紀昀は『続通志考補』の編纂に携わってもいるので、『三才図会』と『図書編』とが『通志』以来の図譜の学の系譜に位置付けられると認識していたはずである。『総目提要』の『図書編』の項に「明人の図譜の学 惟だ此の編（『図書編』）と王圻が『三才図会』とを号して巨帙と為す」としているのは、『通志』図譜略が示した図譜の学の概念規定を受けてのことであると推測される。

この『通志』図譜略は、「図」と「書」とを次のように説明している。

「河 図を出す」は、天地に自然の象有ればなり。「洛 書を出す」は、天地に自然の理有ればなり。天地 此の二物を出し、以て聖人に示すは、〔図・書が〕百代の憲章をして必ず此に本づきて、而して偏廃す可からざらしむ者なればなり。……図は至約なり。書は至博なり。図に即きて易を求め、書に即きて難を求む。古の学者は学を為むるに要有り。図を左に置き、書を右に置き、象を図に索め、理を書に索む。故に人も亦た学を為め易く、学も亦た功を為し易く、挙げて之れを措すこと左契を執るが如し。後の学者は図を離れ書に即き、辞を尚び説に務む。故に人も亦た学を為め難く、学も亦た功を為し難し。平日胸中に千章万巻有りと雖

ども真の行事の間に及びては、則ち茫茫然として向かう所を知らず。

ここでは、「図」は、形象をその内に求めて直感的簡易な理解を助ける図象的表現による文献であり、それに対して「書」は、道理をその内に求めて論理的難解な理解を助ける文字表現による文献である。よって「左図右書」とは、左に図象的表現による文献を置き、右に文字表現による文献を置くこと、という意味になる。『総目提要』が「左図右書の意」によるとしたのは、『図書編』を『図（図象）書（文字）編』と考えたからではないか。『中国類書目録初稿』以後の評価、例えば、陳宏天「中国歴代類書」（『百科知識』第三輯所収・中国大百科全書出版社・一九七九年）、戚志芬『中国的類書、政書與叢書』（中国文化史知識叢書 八六・台湾商務印書館・一九九四年）などが、「左図右書」という語こそ用いないものの、図と文章とが豊富な類書としているのも、結局は『総目提要』に由来する。

しかし、『図書編』編纂の根底をなす「図書」の、特に「書」の概念は右に述べたものとは異なる。例えば次のように述べている。

河図洛書は伏羲の時に已に並び出づ。『易』に曰わく「河 図を出し、洛 書を出し、聖人 之れに則る」と。蓋し龍馬の旋文に則りて之れを画して図を為り、霊亀の坼文に則りて之れを画して書を為る。……図書の数を以て之れを観れば、河図は陽数二十五、陰数三十、共に五十有五。洛書は陽数二十五、陰数二十、共に四十有五。此れ乃ち天地生尅の数にして、自ら同じからざる有り。然れども其の理は則ち一なるのみ（『図書編』巻一「河図洛書総論」）。

これによっても明らかなように、「図」「書」すなわち河図と洛書とは、聖人が龍馬の旋文と霊亀の坼文とに則り、陰陽の相生相尅の理を象徴する十数（五五）九数（四五）を図象化したものである。「図書は天地の至文なり」との言葉は、この文字表現に拠らない図象に天地の理が象徴されているという図書学の思想からの表明である。

とすれば、『通志』図譜略が、「図」「書」の由来を繫辞伝の河図洛書伝説に求めながらも、「書」を文

字表現による文献と見なしたのとは、その概念に於いて異なる。よって、『図書編』の図象への関心を、恐らくは、『通志』図譜略に依拠して「左図右書の意を取る」と説明した『総目提要』、更にそれを継承した『鄭堂読書記』『中国類書目録初稿』及び現在に至るまでの評価は、『図書編』の根底に宋代以来の図書学が有ることに触れない、或いはそれを指摘しながらも妥当でないとして退ける不十分なものであると言える。

次に②全体の構成について、『総目提要』は次のように述べている。

一巻より十五巻に至る　経義と為す。十六巻より二十八巻に至る　象緯歴算と為す。二十九巻より六十七巻に至る　地理と為す。六十八巻より一百二十五巻に至る　人道と為す。一百二十六巻　「易象類編」と為す。一百二十七巻　「学詩多識」と為す。此の二巻　図譜と渉る無し。別に末に綴る。蓋し『玉海』　諸書を附録する例〔と同じ〕なり。

この「此の二巻」以下は、書前提要では、

例に於いては当に経義の中に入るべきも、而れども別に末に綴る。蓋し『玉海』　諸書を附録するの例なり。

となっている。問題は、「易象類編」「学詩多識」が図と無関係で、全書の体例からすれば、巻一から巻一五の経義の部分に編入されるべき性質のものであるにもかかわらず巻末に付されているのは、王応麟の『玉海』の巻末に、類書としての本文とは関係のない彼の数種の著述が付されている例に倣ったのであろうとする評価である（注一二）。この点について、『鄭堂読書記』は言及しないが、『中国類書目録初稿』は「此の二巻（「易象類編」「学詩多識」）は図譜と渉る無し。殆ど『玉海』　諸書を附録するの例に本づく」と『総目提要』の評価を踏襲している。

次章に於いて、本章で指摘した従来の評価の問題点を解明しつつ、図象の類書『図書編』が如何にして成立し、全体が如何に構成されているか、その思想的意味を考察する。

第三章　『図書編』成立・構成の思想的意味

『図書編』が天地人の諸事象の分類的把握を意図し

た「類書」であることは次の言葉から明らかである。

予 因りて備さに其の身心に切にして国家に関する者を採り、類を以て之れを編み、題して『図書編』と曰う（「自序」）。

爰に古太極図・河図洛書・易卦より以て天道・地道・人道に及ぶまで皆 類を以て編む（「図書編原」）。

では、なぜこのような類書を編纂したのか。章潢は先人の類書として杜佑の『通典』・馬端臨の『文献通考』・丘濬の『大学衍義補』を「国家の実用に俾有り。考索に備う可し」（「自序」）と高く評価し、『図書編』もその系統を沿襲するものと位置付けた。しかし、「果たして僅かに沿襲するに止まらば、則ち〔『通典』『文献通考』『大学衍義補』の〕三書 備われり。亦た奚んぞ図書の編に取らんや」（同上）と言うように、踏襲に止まらぬ独自の意図が有った。それは聖学・聖人の心への到達を目的とする学問の振興である。

章潢は、当時の学者の弊を二種に代表させて次のように述べている。

斯道 明らかならず、聖学 湮塞す。正すに鶩博（博学に努めること）を以てする者は俗、徑約（直接に簡約を求めること）もてする者は虚（「自序」）。世の儒者、訓詁に支離し図を案じて驥を索め（既製の法に拘泥して臨機応変を知らぬ譬え）、徒に古人の糟粕を得る者は之れを俗に失し、玄寂を宗とし本体を譚にし、単提直指（方便手段に拠らず直接に真理に至ること）の流に沈溺して且つ自ら覚らざる者は之れを空に失う。何ぞ聖学の日に日に漓れて日に日に晦きを怪まんや（「図書篇原」）。

「俗」とされるのは朱子学亜流の学者、「虚」「空」とされるのは仏・老に接近した王学左派を指すのであろう。両者共に聖学を衰頽させるものと見なされた。

その理由は、彼らが、聖人もそれを規範として則った所の河図洛書の重要性を理解しない点に在るとして、次のように述べる。

〔朱子学亜流の学者と王学左派のそれとの両者は〕惟だに聖人の経典を祖述するを知らざるのみに非ずして、抑そも 天地の文章を追原するを知らざるなり。六経四書 以て造化を闡らかにし人心を淑くすと雖ども、猶お聖人の文と曰うがごとし。「河 図を出し、洛 書を出し、聖人 之れに則る」、一に

皆な夫の天地自然の文に則るのみ。然らば則ち河図洛書を謂いて天地の文章と為すは非なるか。後儒の学聚問辯は未だ之れに神を潜めず。間ま留意探索する者有るも、又 穿鑿傅会して、諸れを身心に反し以て徳を天地に合わせんことを求むるを知る莫し。此れ図書の日に日に益ます晦き所以なるのみ（「自序」）。

章潢にとって学問とは、経書すなわち「聖人の文」は言うまでもなく、世の学者が重要性を認めない河図洛書すなわち「天地の文章」に於いて、聖人が「天地自然の文」に則った意味を追求し、我が心に反省を加えて、聖人の心に到達することであった。学問がそのようであるとすれば、

凡そ上は天象、下は輿地、中は人・物、孰れか天地の文章に非ざらん。孰れか太極の散見に非ざらん。亦た孰れか吾人 天地を参両するの問学（聖人が易を作った意図を悟る学問）（注一三）に非ざらんや（「自序」）。

人道は、天を参にし地を両にし、以て性を尽くす（注一四）より大なるは莫し。然れども宇宙内の事は、性の分内の事に非ざる莫し（「凡例」）。

と述べるように、第一章で章潢の易学の心学的性格を述べた際に指摘したのと同様、天地万物・宇宙内のすべてが我が分内の事として把握され、聖人の心に達する学問の範囲内のこととなるのである。このように、『図書編』は、章潢の図書学・心学の立場から宇宙内のすべてに通ずることを意図して著された類書であると言える。

また、図への関心について、如上の理由及び第一章に述べた章潢の図書学の立場から、『図書編』が図象に関心を持ち、巻一から巻八において諸易図が収録されていることが理解できる。ただ巻九より巻一五の五経・四書に掲載される図、例えば、礼に関する「三礼図」（巻一三）は、「『周礼』は綱為り。『儀礼』は経為り。『礼記』は伝為り」という句を右から順に配列しただけのものであり、天地万物を象徴的に図示しうる易図とは性格を異にする。にもかかわらず、それを『図書編』中に編集した理由を次のように述べる。

詩・書・春秋・三礼・四書 其の図 大全と諸集伝とに見ゆる者も亦た多しと雖ども、要するに皆 後

儒 其（経書）の中に訓うる所に因りて、図 以て之れを記す。原より易卦・図象の比に非ざるなり。茲に亦た『図書編』を類集するは何ぞや。蓋し河洛卦爻は皆 天地の造化の秘にして、聖人 或いは規もて之れを円にし、或いは矩もて之れを方にし、或いは縦横錯綜して之れを変通す。象を仮りて以て化機の隠を洩し、人の性命の精を示すに非ざる無し。五経四書 孰れか図書の蘊奥に非ざらんや……噫、五経四書は即ち図書・卦象。或いは言を以て顕らかにし、或いは象を以て昭らかにす。原より二無きなり（『図書編』巻九「五経四書各図総叙」）。

章潢は、図書・易象も五経四書も、一方は図象により一方は言語によるとの差はあるが、共に天地の造化・人の性命の隠微精密なるところを明らかにする点で一致する、と述べる。しかし、なぜ五経四書についてまでも図象を掲載するのかという点については明言しない。

五経四書の諸図を察するに、経書の概要を簡易に図示したものである（「間ま亦た経書の大綱を掲ぐ」（同前）とは、これらの図の性質を述べたものか）。よって、詳細な図解が望まれる礼に関しても、前述の「三礼図」が掲げられるに止まる。なぜこのような図を敢えて収録するのか。

〔礼は天の秩序に基づくべきで、漢儒の煩瑣な説に混乱されてはならない〕此れ礼を論ずるや其の原を識るを貴び、『礼記』〔を読むとき〕は〔漢儒の施した〕伝を以て言う可からざる所以なり。否れば則ち或いは己が見を逞しうし、或いは旧聞を執りて徒らに儀文度数の末・品物器用の微に詳しきを致し、名義を解し規制を定め、遂に以て礼は是こに在りと為し、見礼・知政と天地と節を同じくすること果たして安くに在るかを知らず。是の故に礼を求むる者 礼を書に求むること無くして諸れを吾が心の天に求むれば、則ち渾然たる大中の道 已に我に在り（『図書編』巻一三「三礼総叙」）。

これは、王陽明の「〔礼の名物度数を先ず研究すべきかとの質問に答えて〕人は只だ自家の心体を成就せんことを要す。則ち用は其の中に在り。……苟も是の心

無くんば、予め先ず許多の名物度数を講じ得と雖ども、己と相い干からず」（『伝習録』上）と同様、礼の末節の詮索よりもその本質を心に具わった理に求めることこそ重要であるとする立場からの発言である。このような章潢の心学的学問観からすれば、本来抽象的な議論による五経四書の内容も極めて簡易な図象表現により体認できることになろう。これが、『図書編』が図書学の図示的象徴的表現方法を易図以外、とりわけ抽象的な言語表現による五経四書に応用し、『三才図会』の具体的な図とは異なる象徴的な図を多く収録することとなった理由であろう。

次に②『図書編』の構成について述べる。『図書編』一二七巻の構成の概略は次の通りである。巻一～八――古太極図・河図洛書図・先天後天図・易卦諸図・諸儒の図／巻九～一五――五経四書／巻一六～二八――天道編（天体・気象・時令・暦など）／巻二九～六七――地道編（分野・禹貢九州・明代各省沿革・処置・辺防・内夷・外四夷・海洋河川漕運防衛など）／巻六八～一二五――人道編（身体・心性学術・帝王・吏曹・戸曹・礼曹・兵曹・刑曹・工曹）／巻一二六――「易象類編」／巻一二七――「学詩多識」

これが、『易』の「三才（三材）」に基づくことは明白である。しかし、それだけではない。

豈に特り図書（河図洛書）・先後天図・『周易』の卦爻 皆 此れ（古太極図）より彼れを出すのみならんや。上は天文、下は輿地、中は人情・物理・国家・礼楽・制度、千変万化 孰れか太極の運用に非ざらん。此れ古太極図 図書の冠為たる所以なり。惟だ此の図に於いて其の底裏に透徹すれば、則ち諸図は皆 範囲の中に在り（『図書編』巻一「編首古太極図説」）。

「天地の文章」とされる河図洛書はもとより天道・人道・地道の三才のあらゆる事象は太極の散殊であり、編首の古太極図に象徴的に統一される。宋学以降、易の太極思想に基づいて、本体と現象との関係を説く基本的思惟方法、すなわち理一分殊・体用一源の思惟方法が生まれたが、『図書編』の全体の構成がそれによって体系付けられていることは明らかである。

最後に、巻一二六「易象類編」・巻一二七「学詩多識」は、それが図象と無関係であるため、王応麟の『玉

海』が巻末に彼の諸著述を付録するのと同様、単に章潢の著作を付録したかのように見なされている。しかし、章潢の意図としては、

万物散殊 曷ぞ能く尽く図せんや。特だ易・詩の名象より類を以て之れを編み物理の一端を備えんとしか云う」（「凡例」）。

とあるように、太極の分散としての数限りない個物の図示は不可能なので図象こそ無いものの、天地万物の象徴の書たる『易』と博物学の性格をもつ『詩』から言葉を抜粋して、万物を分類的に把握せんとしたものである。『図書編』巻末の二巻は、類書『図書編』の一部分を構成するものであり、『玉海』が王応麟の諸著述を付録する例とは明らかに異なる。

結

以上、主に章潢の易学との関連から、『図書編』の成立・構成の思想を考察した。その結果、図象を多く収録する類書『図書編』は、宇宙内の事を我が心の分内の事として学問の範囲内に収めんとする心学的学問観、万物は図象によって象徴的に図示しうるとする図書学の思想とその方法論、及び太極思想に基づく理一分殊・体用一源の構成原理から成立したものであり、宋明学的特徴をもつ類書であると言うことができる。今後は、『三才図会』及び多くの図象を収録する類書について、また『図書編』の経世思想と明末の思潮とについて考察を進める予定である。

注

（一）テキストには用万暦四一年刊本影印本（成文出版社・中華民国六〇年）を用いた。また、「章斗津先生行状」については、前掲本に付されていないので、四庫全書本（上海古籍出版社・一九八七年）を用いた。なお、『図書編』のテキスト、編纂・刊行の経緯については、拙稿「『図書編』の書誌学的考察」（『待兼山論叢』二八号哲学編所収・大阪大学文学部・一九九四年）参照。

（二）多賀秋五郎「王陽明と明代の教育制度」（『陽明学入門』所収・陽明学体系第一巻・明徳出版社・昭

和四六年九月）参照。

（三）例えば、王陽明は「聖人の心は明鏡の如し。只だ是れ一箇 明らかならば、則ち感に随って応じ、物として照らさざる無し」（『伝習録』上）と述べる。また、陽明の門人の徐愛は陽明の心学的修養を説明して次のように述べている。「曰仁（徐愛の字）云う、心は猶お鏡のごとし。聖人の心は明鏡の如く、常人の心は昏鏡の如し。近世（朱子）の格物の説は、鏡を以て物を照らすが如く、照上に功を用い、鏡に尚お昏きもの在るを知らず。何ぞ能く照らさん。先生（王陽明）の格物は、鏡を磨きて之れをして明らかならしむるが如く、磨上に功を用う。明らかになり了りて後 亦た未だ嘗て照を廃せず」（同上）。王陽明の明鏡論については、岡田武彦『王陽明』上冊（明徳出版社・平成元年）二九～三五頁、下冊（平成三年）九一～九五頁を参照。

（四）嘉靖二五年・二〇歳から嘉靖三三年・二八歳までは、「年譜」に「挙子業を正気堂に肄う」と記すが、嘉靖三三年の父の死、嘉靖三六年・三一歳の弟の死を経て、嘉靖三七年以後は「業を正気堂に肄う」と記すのみである。また嘉靖三七年以後、友人と学を講じることが多くなり、著述を始めていることから（嘉靖三九年「寤言寤歌」・「学詩多識」、嘉靖四〇年「七志韻言」等）、科挙受験の志を捨てたものと考えられる。

（五）今井宇三郎『宋代易学の研究』（明治図書出版・昭和三三年）一四六～一五〇頁・一五八～一六〇頁、朱伯崑『易学哲学史』中冊（北京大学出版・一九八八年）一～九頁参照。

（六）繫辞上傳の「天下之象」（天下万物の象徴）・「天地之文」（天地の文様。『経典釈文』に「一本『天下』に作る」とあり、阮本十三経注疏も「天下」に作る。）に由来する語。後者は、また繫辞上傳の「天下之至精」「天下之至変」「天下之至神」などの表現を借りて、天地の文様の至上性を強調するものであろう。

（七）明代の易学の特徴について、本田済氏は次のように述べている。「易にしても、宋儒がおのおのの哲学による解釈をしているのに対して、陽明学による易解釈といったものは、ついに完成されなかった。それというのが、陽明のように、「万物はわが心の中にあって、わが心の外には一物もない」という唯心論idealism

の上に立つならば、「六経はわが注脚」（もと陸象山の語）ということになるのは当然であって、経学の権威はこの強烈な自我の前に光を失わざるをえない。……陽明では宇宙が自我の中にある。……陽明では、宇宙の理といって目をそとに求める要はない。経験の代りに直覚、観省の代りに実践で、直接に我が心の理さえ求めればそれで足りる。」（本田済『易学』・サーラ叢書一三・平楽寺書店・一九六〇年）。

（八）陸象山の語「学 苟も本を知れば、六経 皆 我が心の註脚」（『象山先生全集』巻三四）を踏む。

（九）『鄭堂読書記』所引の『図書編』自序は節録である。以下に自序原文の該当部分を掲げる。「……謂河図洛書為天地之文章非歟……今之号称豪傑者豈特于天地之文章未嘗留意即図書名義且莫之辯故雖好蔵載籍汗牛充棟何啻万巻究其所謂図不過画工之末技所謂書不過文字之煩蕪至于天地之文章莫知所宝……予因備採其切于身心関于国家者以類編之題曰図書編」

（一〇）これと同じ言葉は章潢の自序には見えない。周中孚が章潢の意図を要約したものと考える。

（一一）もっとも、この部分に限らず、『鄭堂読書記』は『総目提要』を高く評価し過ぎる傾向がある。長沢規矩也「支那書籍解題 書目書誌之部」（『長沢規矩也著作集』第九巻所収・汲古書院・昭和六〇年）三三六頁参照。

（一二）『玉海』が王応麟の他の著述を付録している点について、『総目提要』（巻一三五・子部・類書類一）の『玉海』の項は、明の瓊貝『清江集』に依拠して次のように述べる。王応麟の孫の王厚が、まだ脱稿せずに失われていた『玉海』を手に入れ、整理出版する際に、王応麟の他の著述を併せた。それが後世に伝わったのである。これに拠れば、元代から『玉海』に他の著述を付録する例が始まったのであろう、と。

（一三）説卦伝に「昔者 聖人の易を作るや、神明に幽賛して蓍を生ず。天を参にし地を両にして数を倚つ。変を陰陽に観て卦を立て、剛柔を発揮して爻を生じ、道徳に和順して義を理め、理を窮め性を尽くして以て命に至る」とある。章潢は「参（天）両（地）」を「聖人 易を作るの本旨」（『図書編』巻一・「参両参伍総論」）という。

（一四）説卦伝の文を踏む。注（一三）参照。